

トピックス
1. 播州日誌
2. 南国土佐を後にして 第22回



福留経営労務管理事務所
 姫路龍馬会
 社会保険労務士・行政書士
 福留 章

<h1>龍馬通信</h1>	No. 78
	2024年6月号

芒種～夏至の季節

思い通りにならないこと

入梅の季節

梅雨の晴れ間に 日脚を楽しむ
 早い朝の訪れ 遅い夜の再来
 梅雨前線の停滞
 しとしとと降る 長雨
 来る日も 来る日も

ストレス社会

カラカラにひび割れた
 人の心に
 染み入るように 降る雨
 新緑をより鮮明にするように降る雨
 慈雨 恵みの雨
 そんな雨には 風情があり
 趣がある
 文人 佳人が競って
 謳いあげた 瑞穂の国 日本

昨今の異常気象

雷鳴を 響かせて
 地面をたたく 激しい雨
 次ぎ次と 襲いかかる
 線状降水帯
 史上かつてない 大災害に
 人は戸惑い 恐れおののく
 地球規模の温暖化と環境破壊
 盛は失われ 大地は削られる
 住めなくなった人々は土地を追われ
 移住を余儀なくされる

人生を振り返れば

思い通りにならないことの連続

およそ思い通りになる事など
 めずらしく 短く 少ない

だからこそ
 たまに訪れる
 思い通りになったことを
 大切に思う
 その時間を惜しみ
 心に刻み付ける
 そんな繰り返しこそが
 人生を豊かにする
 思い通りにならないからこそ
 思い通りになった時
 人は幸せを 噛みしめる

歳を重ねるほどに
 否応なく訪れる
 病・老・死 への恐怖
 立ち向かう力も 次第に
 か弱いものになっていく

だからこそ
 今日あることを喜び
 今日一日を
 人の為 世のために 尽くす
 そのことが何よりも大切なことだと
 しみじみと思う

梅雨の季節に





播州日誌

出生率の低迷

♪♪何でこんなに かわいいのだろう 孫と言う名の 宝物 ♪♪ 民謡歌手が歌って一世を風靡した「孫」という歌詞の一節である。「子供は国の宝」とはよく聞く言葉であえて反対はしない。そもそも国力は豊かな人口に裏打ちされる。そのことは出生率の低い日本を始め先進国共通の国力の減退という課題になっていることわかる。中国やインドの世界的な台頭はその豊かな人口が原動力になっている。

日本でも少子化対策として、数々の施策が打ち出されている。育児介護法の改正、仕事と育児の両立支援など。しかし一向に出生率はあがらない。むしろ長期低落傾向が続いている。個人的な見解だが、場渡り的で、「隔靴搔痒（かっかそうよう）」つまり靴の上から痒い所を搔いているように思えてならない。経済的な支援にしても税金から出ており国の借金はやがて時代を担う若者の負担を重くする。賢明な母親たちはそれを選択しない。

諸外国の成功例、例えば英国のように多額の一時金を支給する制度などを参考に若い母親たちの疑念を払しょくし、安心して、喜んで出産と育児に専念できるような制度に改善すべきである。小出しに修正するのではなく抜本的な改革の必要性を感じる。

日本の乳幼児の死亡率は低い。そのノウハウと経済的な支援を全世界に広めることも我が国が担う重要な使命だと思う。飢餓と貧困にあえぐ後進国を見捨てることはできない。

出産前の子の姿はエコーで見ることが出来る。子宮内の羊水の中で活発に手足を動かす赤ちゃんの動きは、尊く感動する。

世界中の嬰兒の未来が明るく輝く未来であって欲しい。それは我々人類の共通の願いでありその実現は私たちの責任でもある。

2024. 5. 31



久礼（くれ）の日帰り鰹

高知県高岡郡中土佐町久礼は、高知市から車で約40分。高知県西部に位置する。高知道の延伸で中土佐町インターまで直行できる。高速を降りて下道を10分ほど。太平洋が見渡せる小高い山の上に黒潮工房がある。同じ敷地内に黒潮本陣があり、露天ぶろや座敷の部屋があり高級である。私はもっぱら安くてうまい黒潮工房がお気に入り。これまでももう十数回訪れ延べ100人近くの人をお連れした。

毎年9月にグループ15人ほどで「本物の鰹を食べる会」を主催している。幹事である私の仕事は、工房に着くや否や、一番にバスを降りてフロントに一直線。全体の予約はできているが、それとは別に注文するものがある。ハランボ（鰹のトロ部位）チチコ（鰹の心臓）地魚の干物、久礼天（さつま揚げ）。ハランボなど一尾からひとつしか取れない希少部位は販売数も限られていて人数分揃えるのは難しい。それから一括清算の交渉。それが終わると体験コーナーへ。今は鰹を捌く体験は中止になっていて、調理済みの鰹の節（ふし）をみんなで薫焼きする体験。まず塩を振ってフォークの親方みたいなものの上に節を乗せる。長野県産の藁（わら）を二つかみ程を炉に入れて火をつけると、その火柱は2m以上に達する。その炎の真ん中あたりにフォークを差し入れるのである。これがなかなかの重量でしっかりと腰を決めないと保持できない。2面約5~6分藁を補充しながら焼く。

脂ののった鰹の節が焼かれて2割ほど縮まる。

テラス式のテーブルの真ん中に七輪を置く。タタキは焼き立てのぬくぬく状態でテーブルに並び。七輪では件のハランボなどを焼く。ほっこりしてこれがまたうまい。都会では焼いた後冷水にさらすのが定石だが、ここでは焼き立てをそのまま食する。ゆずぽん酢、塩、ワサビ。どちらにしてもうまい。ニンニクや薬味が鰹の旨味を引き立てる。最近は塩タタキが流行だ。

うまいのには理由がある。久礼はコミック「土佐の一本釣り」のモデルとなった漁港で高知県でも鰹の漁獲高は群を抜いている。鰹は普通、上り鰹と戻り鰹に大別されるが、一部の群れは久礼沖に留まって回遊する。それを狙って夜半に出港、一本釣りで鰹を獲る。氷で鮮度を保ちながら朝には久礼港に戻る。これを称して鰹の日帰り漁（日帰り鰹）という。鮮度抜群なのは当然で一度も冷凍していない、まさに生鰹。不味いわけがなく、最高のカツオのタタキ食する穴場として評判も高い。

鰹でおなかがいっぱいになったら、車で10分ほど移動して大正市場へ。災害時大正天皇から下賜された救済金をもとに開設された市場。間口一間、店舗数10軒足らずの小さな市場だが、販売している中身は濃い。ここで土産を調達する。鰹のタタキの真空パックが評判で一節1500円程度。宅急便もある。去年は15名で40本近くを購入した。市場に入って右側すぐの山本鮮魚店がおすすだ。

本物の鰹を食べるなら、何と言っても、中土佐町久礼に行くべしである。

2024. 6. 1



第10回

社労士 野口 亮 がゆく

技能実習生を管理する

野口の日程管理は、今でも事務所の白板の予定表と社労士手帳。月の半分を過ぎると予定表の上段は翌月の予定が書き込まれる。まずは安全衛生委員会。オブザーバー参加している会社の予定を入れる。毎月第〇火曜日など定例にしている場合が多い。それから定期訪問の会社訪問日が入る。その後併設する外国人雇用の受け入れ機関である、協同組合の予定を追加する。技能実習生の場合、最初の1年間は毎月1回の訪問が義務づけられ訪問指導を行う。そして3か月に1回は、事業主の法違反などをチェックする内部監査をしなければならない。配属する人数が増えれば管理する内容も複雑多岐に及び多忙を極める。6月の初め、野口は、1か月の予定表（白板）を見ながら、ふっとため息をついた。折しも配属先の事業主から連絡が入り、技能実習生の1人がリンパ腺を腫らしてのどの痛みを訴えているとのこと。医療機関への送迎は原則的に事業主の負担と決められている。しかし緊急の場合などは、事業主が病院に連れて行っても、言葉が通じず医師も困惑する。それで通訳を派遣してほしいとの要請だった。実際のところ例えば野口が飛んで行ってもあまり問題解決にはならない。何といても通訳の力を借りなければ問診もできない。

「原則は事業主が連れていくことになっているのは承知しているが、今回は何とかして欲しい」。社長のすぎる

ような要請には、誠意をもって答えなければならない。

「予定変更させて午後には通訳を派遣します。」

「助かりました。時間まで本人は寮で待機させます」

契約通りの監理では間に合わないことが多い。日本に来て働く外国人の為とはいえ、しんどいことではある。予定変更のアポ取りの為スマホを手にする。自分も病院に行くつもりである。



～南国土佐を後にして～

第 22 回 「東京編」 大学紛争

大学時代 2 回生から 3 回生の間、多くの日時が、日大紛争に端を発した大学紛争に巻き込まれ教育の場が闘争の場と化した。学生たちは日夜デモを敢行し、学舎を占拠し閉鎖した。

学校側はロックアウトと称して学生の登校を拒否し双方の闘争は長期化した。次第に全国に拡大し一時的に「全共闘にあらずんば人にあらず」とまで言われた。最初の段階ではデモにも参加し、集会でアジ演説も聞いた。私には生活がありアルバイトする必要があったので次第に「社会的改革」の熱が冷めていき、後半は完全にノンポリ（政治的無関心）になった。

学生運動が全国的に拡大し、先鋭化する中で武装闘争の道を進むことになる。闘争の目的が曖昧なものになり暴力と破壊が目的となった。サークル活動も停止し、坂本ゼミナール文章研究班のキャプテンであった私は何度かつるし挙げられた。しかし私は全共闘的思想と行動についていくことが出来なかった。先鋭化したセクト主義による暴力的反抗については反対の立場だった。当時の大学紛争についての歴史的評価は今でも定まっていない。あさま山荘事件や赤軍派といった負の部分がクローズアップされた。私は今でもあの闘争が何を社会的にもたらしたかという問いに正確に答えることが出来ない。一部の人に「卑怯者（ひきょうもの）」と呼ばれた私だが、や

がて学生運動が自滅して結局元の姿に戻ることが予想できた。案の定、一部の過激派を残して学生運動は終わりを迎えた。多くの者は髪を切り就活に励んだ。何か変わったことがあったかと言えば、本質的に何も変わらなかったように思う。

アルバイトの兼業をした。宿直の仕事をしてながら昼間は配送の助手をした。生活の為何でもやった。言われたことは大過なくこなして、重宝がられた。楽しみは社員の人たちに誘われてよく飲み連れていってもらったこと。

4 回生の夏の頃から授業が再開された。と言っても集中講義と言う名の辻褃合わせの授業で、それで単位が与えられ卒業させることが目的の授業であった。従ってそれなりの成績で卒業できた。卒論は「UHS TV 放送の認可とその影響について」。NHK の月刊誌数冊を読んで取りまとめた内容で、詳しいことはもう記憶にない。ただその UHF 放送の中に今のサンテレビが入っていたことは覚えている。就活もしたが、讀賣新聞、高知新聞は不合格。

先生の推薦で農機具新聞という業界の御用新聞の内定を受けたが、結局辞退した。

酒におぼれて暮らしたツゲがまわってきた感じ。そんな時バイト先でお世話になった部長さんから、「いっその事、うちに来ないか」と誘われ、あまり深く考えることもなく船橋の食品会社（佃煮の製造販売）に就職した。すでに兄が営業部に勤務していたし、彼女（現在の私の妻）も集団就職で上京し働いていた。そんな状況で何となく一番楽な道を選んだような気がする。昭和 45 年、春のことである。



年度更新と算定基礎届

そろそろ年度更新と算定基礎届の季節です。事業所の皆様には次の資料の提出をお願い致します。

年度更新 令和 5 年 4 月～令和 6 年 3 月までの総賃金を月別、雇用形態別（正社員、役員、パート、アルバイト）に集計したもの。月別の人数、賞与支給の有無も必要です。SR 関係は終了しています。

算定基礎届 令和 6 年 4 月 5 月 6 月（支払いベース）に支払った賃金の総額（控除前支給総額）及び昇給の有無、月額変更届の資料を提出して下さい。